資料

宇田川文海伝の筋書

堀部功夫

弘化五年＝嘉永一年（一八四八）　一歳

二月四日（除籍謄本）、江戸の本郷新町屋に生まれた。父の伊勢屋市兵衛は、道具屋を営んでいた。母は鳥山氏（「新聞記者に成るまで」）。

遺族の話（昭四三年三月刊「朝日旧友会報」・清水三郎氏「朝日新聞外史64」による）によれば、伊勢屋市兵衛には四男二女があった。文海はその四番目で三男である。一番上は吉太郎という兄、二番目は次男の真平（天保一一年生まれ・のちの茂中貞次）、三番目は長女のおくにである。弟は市松、妹は愛子といった。

文海の初名は棄三。

嘉永六年（一八五三）　六歳

「私は六つ七つの時から、父と祖父との遺伝の故か、草双紙を読むのが大好きで」（「新聞記者に成るまで」）、演劇・浄瑠璃にも目が無かった。（「朝日新聞創刊以前の大阪の新聞」）。

嘉永七年＝安政一年（一八五四）　七歳

この年より足かけ三年、寺小屋の教育を受けた（「新聞記者に成るまで」）。

安政三年（一八五六）　九歳

一二月、幕府の伝馬御用と名主を兼ねていた、大伝馬町の馬籠勘解由方へ、丁稚初奉公に行く（同）。

安政四年（一八五七）　一〇歳

尾州家の用達、市ケ谷本村町の小菅庄次郎方へ奉公に行った。この年、母を失う（同）。

安政五年（一八五八）　一一歳

この年、父を喪う（同）。

安政六年（一八五九）　一二歳

四月八日、出家得度する。主人の小菅からお前は書物ばかり好んでいて商人には不向ゆえ僧侶などになるのがよかろうと助言され、同人の周旋で駒込養源寺の住持南明和尚の弟子となったのである。法名を恵海と名乗る（同）。

万延二年＝文久一年（一八六一）　一四歳

七月下旬、南明和尚が恵海を供に湯島麟祥院より帰途の暗闇で、浪士に斬りつけられた。「やがて蓮光寺といふ寺の、門前近い所まで来かゝると、後から来た師匠は、アッといふ一声を叫ぶと共に、ドーとばかりに倒れた。私は此時何の気もなく……師匠は酒を過してゐる故、石に躓いて転んだのだらう……と考へ、早く扶け起して進ぜやうと思って、急に振返りさま、手に提げてゐた提燈を、首より高く振上げたが、そのトタンに提燈と共に、右の頬から胸へかけて、ハスに一太刀斬りつけられ、ハッと驚いて、一ト足後へ飛退る間もなく、二度目の太刀は左の顎に斬りつけられた。」

一〇月上旬、南明和尚はこの疵が基となって死亡した。文海は外科手術を受けて一命は取止めたが、醜い傷あとが残った（同）。

慶応二年（一八六六）　一九歳

秋、養源寺の末寺の、下総結城の華蔵寺へ住職見習として転住した（同）。

明治初年

排仏毀釈運動が伝わり、衆生済度の仕事が行詰まった。そのうち生活も逼迫してくると、文海は華蔵寺を兄弟子に譲り、還俗することゝなる（同）。

明治三年（一八七〇）　二三歳

一二月、単身上京して谷中南泉寺門前に身を寄せ写字などで生計を立てはじめる（同）。

明治四年（一八七一）　二四歳

上京して来た次兄茂中貞次と久しぶりに対面した。茂中はそれまでに本木昌造について活版印刷をマスターしていた。やがて茂中は大学東校構内に文部省御用活版所を開いたので、文海も同所の見習生となって印刷術を学ぶようになった（同）。

明治六年以後新暦（一八七三）　二六歳

二月来、「まいにちひらがなしんぶん」社に組方として雇われていた（「朝日新聞創刊以前の大阪の新聞」）。

八月四日、「秋田県ヘ新聞局ヲ開キ活字版ヲ広メン事ヲ依頼サレ」（「秋田日記」――昭五年一一月五日刊「公私月報」記事による）千住駅を立った。「秋田日記」というのは、その時の赴任記録である。草鞋脚半での山河跋渉、宿場々々における女郎買などが記されている。

明治七年（一八七四）　二七歳

二月二日、「遐邇新聞」第一号創刊。文海の鳥山棄三は編輯人。文海はこゝで「物を書く事を習った、新聞記者の修行をした。」そしてゆく〳〵は「筆をもつて立つ事にしやう」と心に決めた（「朝日新聞創刊以前の大阪の新聞」）。

〔一〇月、茂中は神戸に出、活版所を開き、県庁等の印刷の注文に応じ、傍ら「神戸港新聞」を発行した。〕

明治八年（一八七五）　二八歳

八月、文海は約束の二年間を首尾好く勤め「遐邇新聞」を辞して帰郷した。

一〇月、茂中の招請で神戸に赴き、「神戸港新聞」に入社。同僚に関徳・赤荻文平・浮川福平がいた。

神戸へ来て間も無く大阪を初見物した。当時大阪にはまだ日刊新聞が無かったのを不足に思った文海は、同地での新聞発行を思い立った。

一二月一〇日、「浪花新聞」第一号創刊。大阪における最初の日刊小新聞である。編集は文海と赤荻文平（後に伊藤一英が加わる）とであった。探訪者に佐伯久作ら、投書家に山本与助らがいた。

明治一〇年（一八七七）　三〇歳

この項から、山本与助らの新聞広演会に出席。同会は投書家の定期的演説会で、文海も演説を勧められたが、座談は人から上手と言われる程よくしても、演壇に上ることはどうしても出来ず一度もやらなかった（同）。

夏、「浪花新聞」社長黒川正治と意見の扞格を来したので、涙を呑んで同社を去る。

この後、茂中の勧めに従い、「大阪新聞」に入社。雑報の主任に当たった。

八月一八日から、「実生新聞」にも筆をとった。しかしこの「実生新聞」は一一月に六一号を以て終刊してしまった。

この後、山脇巍の誘導で「大坂日報」に転じた（同）。

明治一一年（一八七八）　三一歳

この年、石町三橋楼における新聞記者懇親会に出席、岡野半牧とはじめて知った（「岡野半牧を悼む」）。

明治一二年（一八七九）　三二歳

一月、「俳優評判記」を金蘭社から勝諺蔵と共著刊（「勝諺蔵と勝能進」）。

三月二九日、小室信介と交友を持ち、二人が主となって「此花新誌」第一号創刊。「団々珍聞」を模したとも見るべき諷刺戯文雑誌。六月一二日、第八号で廃刊か。

五月一九日、播半亭における篠田仙果（「月とスッポンチ」社長）・栗田松三郎（「芳譚雑誌」主幹）の宴会に「大坂日報」代表の一人として出席（五月二一日付「朝日」記事）。

七月二〇日から、「西南拾遺」（四冊）編輯刊（七月二三日付「朝日」記事）。

八月二五日、三橋楼における神戸広園社開業式に金蘭社を代表して出席（八月二七日付「朝日」記事）。

明治一三年（一八八〇）　三三歳

四月一七日、京都円山端の寮における「常盤新聞」開業式に「大坂日報」代表の一人として出席（四月二〇日付「朝日」記事）。

〔五月三一日、朝日新聞社主幹津田貞、同社主木村騰・平八と対立し、退社。〕

七月一五日、「大坂日報」退社（七月一七日付「朝日」記事）。津田貞に引抜かれたためである。文海は画家山崎年信・探訪者佐伯久作を伴れて、津田の「魁新聞」へ入社した（「朝日新聞創刊以前の大阪の新聞」）。

八月二〇日、「魁新聞」第一号創刊。文海は印刷長。同僚に若菜貞二・半井桃水・小宮山天香がいて親交を結ぶ。

一一月二六日、新町橋西詰新宇楼における栗田松三郎の宴会に「魁新聞」代表の一人として出席（一一月二八日付「魁新聞」記事）。

明治一四年（一八八一）　三四歳

一月二日刊、隅田了古「新聞記者奇行伝」初篇に評がある。「坂地ハ操觚者に乏しきが故に野史雑誌戯場評判記に至るまで皆君が手に成ざるもの稀なり実に明治の西鶴自笑と称すも誣言ならず」。文海の名声は既に認められ隠然たる勢力を持っていたのである。

三月一三日、中の島自由亭における大阪府下新聞業懇親会に「魁新聞」代表の一人として出席（三月一五日付「朝日」記事）。

八月二一日、「魁新聞」、経営不如意から休刊。社員解散。

九月七日、「朝日新聞」入社（九月七日付「朝日」社告）。社主村山竜平らの斡旋であった（「入社の辞」）。月給五〇円（一説四〇円）は世の羨望を買うべきものであったという。文海は岡野半牧と共に雑報通信等を担当し、主に続き物（新聞小説の前身）に筆を執ることゝなる。一〇月二日から、岡野と共に「朝日新聞」を校閲（一六年五月一七日まで）。

一二月三日から、無署名で「色競べ松と紅葉」を「朝日新聞」に連載（一五年二月二二日、大尾）。

一五年二月八日から、神田伯州が松島花園橋の新席において「色競べ松と紅葉」を読む（一五年二月九日付「朝日」記事）。

一二月から、「春霞筑波曙」（四冊）を和田豊秋堂から校閲刊（一五年六月完結）。

一五年一月、神田伯山が御霊裏講談場において「春霞筑波曙」を読む（一二月二六日付「朝日」記事）。

明治一五年（一八八二）　三五歳

三月四日、東区備後町備一亭における仮名垣魯文饗宴を、若菜貞二と共催（三月三日付「朝日」広告）。

三月五日、北地静観楼における浪花麦酒発売式に出席（三月七日付「朝日」記事）。八日、中村時蔵が会主の道頓堀東見山楼における新聞記者宴会に「朝日新聞」代表の一人として出席（三月一〇日付「朝日」記事）。一七日、堀江市の側前田喜次郎新宅開きの宴会に出席（三月一九日付「朝日」記事）。一九日、静観楼における姫島竹外留別書画会を補助（三月一四日付「此花新聞」広告）。

四月七日から、無署名で「橋岡甚三郎の履歴」を「絵入人情」美也子新誌」に発表。

一六年一〇月三一日、「奇縁井出の下帯」と改題、駸々堂本店より校刊。

四月一二日、北新地裏鶴村楼における田口六石の地歌を聞く集いに出席（四月一四日付「朝日」記事）。

五月七日から、無署名で「北国奇談檜の橘」を「朝日新聞」に連載（七月一五日、大団円）。文名が大いに上がった。

七月から、「北国奇談檜の橘」（三冊）を駸々堂本店より校閲刊（九月まで）。「意外に評判好く初刊の数千部を既に売尽し今度又千余部を再刊せり」（一一月九日付「朝日」記事）、「更に二千部再版」（一六年八月四日付「朝日」広告）、「第五板」（一六年一〇月一九日付「朝日」記事）というベストセラーとなった。

五月、石川一口が灘御影村において「檜の橘」を読み「非常の人気」（五月三一日付「朝日」記事）、一六年五月九日から、燕

林が賑江亭において「檜の橘」に遺聞を加えて読む（一六年五月九日付「朝日」記事）。

九月から、勝能進・勝諺蔵脚色、寿三郎・市十郎・太三郎・璃笑・紫琴の一座が中座において「盛名橘北国奇談」と題して初演（番付）。大入り。

この年、京都西陣では、「檜の橘」の主人公に因んだ忠之進織を織立、たばこ入に仕立て売出した（一二月二八日付「朝日」記事）。

八月、来阪の柳亭種彦（高畠藍泉）と旧交を温める。文海は、この時藍泉によって初代種彦への眼を開かれたらしい。

八月三一日から、無署名で「雁信壺の碑」を「朝日新聞」に連載（一〇月三一日、終）。

九月二七日から、「雁信壺の碑」（四冊）を太田権七方より出版（一一月まで）。二八日から、「雁信壺の碑」（三冊）を駸々堂本店より出版（一一月まで）。

一七年五月一四日、大阪軽罪裁判所は「雁信壺の碑」が「松前徳広ヲ誹毀シタリト認定」し「朝日新聞」仮編集人陶良平に有罪宣告（一七年五月一四日付「朝日」記事）。

一七年八月二二日から、竹柴諺蔵脚色、滝十郎・猿之助・雁次郎・璃笑・珊瑚郎の一座が中座において「雪中松貞忠美談」と題して初演（番付）。

一一月一日から、無署名で「大潮異聞三津廼白波」を「朝日新聞」に連載（一六年四月五日、大団円）。

一二月一五日から、「大塩異聞三津廼白波」（三冊）を校刊（一二月二四日付「朝日」広告）。一六年五月一四日御届、「大潮余聞三津廼白浪」（二冊）を春陽堂より出版。

一六年一月一日から、岩崎花柳が北区桜橋の席において「三津廼白浪」を読む予定（一二月二八日付「朝日」記事）。

この年頃、城山静一について演説法を学ぶ（「朝日新聞創刊以前の大阪の新聞」）。

明治一六年（一八八三）　三六歳

二月二七日から、無署名で「椿説打岸浪」を「朝日新聞」に連載（三月一五日、中絶）。

三月、「椿説打岸浪」初編を駸々堂本店より校正刊（三月一三日付「朝日」広告）。

三月三一日、大阪軽罪裁判所は「椿説打岸浪」が岡部長寛を誹毀したと認定し「朝日新聞」仮編集長陶良平に有罪宣告（四月一日付「朝日」記事）。

四月六日から、無署名で「浮漂断綆夢の手枕」を「朝日新聞」に連載

（六月三日、大団円）。

五月から、「浮萍断腸夢の手枕」を駸々堂本店より校刊（五月三〇日付「朝日」広告）。「三千余部を売出し」（一〇月一九日付「朝日」記事）、「第三版」（一八年四月三日付「朝日」記事）。

四月、一山が堀江市の側一山の講談席において「夢の手枕」を読み「非常の大入」（四月二二日付「朝日」記事）。一一月一日から、円好が両替町と堀江賑江亭とにおいて「夢の手枕」を読む（一一月二日付「朝日」記事）。

九月、勝諺蔵脚色、福助・寿三郎の一座が中座において「短夜夢朝日手枕」と題して初演（番付）。

一二月、菊池三溪が「一刻千金春宵奇談」と題して漢訳（一二月一八日付「朝日」記事）。

六月、柳亭種彦帰京の後を追うように東上、種彦と共に野州日光に遊ぶ。八月、新橋停車場で種彦に見送られて帰阪（八月一八日付「東京絵入新聞」投書）。

七月三一日から、無署名で「欧洲新話花月縁」を「朝日新聞」に連載（八月五日、中絶）。

二〇年八月、「欧洲佳劇断腸花」と改題増補して、岡島宝文館より訳述刊か。

一〇月一六日から、無署名で「勤王佐幕巷説二葉松」を「朝日新聞」に連載（一七年一月二五日、大団円）。大成功、後々も自ら「小説らしきものとして世に出し候」最初の、会心の作と認めていた（「各大家の処女作」）。

一七年一月八日から、「勤王佐幕巷説二葉松」（二冊）を駸々堂より校刊（二月まで）。

一七年一月二六日から、三遊亭円好が神戸楠公社内の席において「二葉松」を読む（一七年一月二六日付「朝日」記事）。

三月、松林伯円が長門座と賑江亭とにおいて「二葉松」を読む予定（一七年三月一三日付「朝日」記事）。

一七年三月、勝諺蔵脚色、延若・宗十郎・璃寛・橘三郎の一座が戎座において「若緑二葉松」と題して初演（番付）、大入り。

一七年七月二二日から、横堀の造物に「二葉松」に因み「妙子捕手にかゝる処鷹狩の場絵姿」等が登場（一七年七月二四日付「朝日」記事）。

一二月二三日、伊藤一英七回忌追善を補助（一二月一八日付「朝日」記事）。

この年度、「朝日新聞」の発行部数は全国第一位に躍進した。この功の一斑は、続き物の、とりわけ文海の作品に負っていると考えられようか。

明治一七年（一八八四）　三七歳

一月二七日から、無署名で「猿阿申新年第一筆」を「朝日新聞」に連載（四月五日、大団円）。

五月から、「新編淀廼車」（二冊）と改題して、駸々堂より校刊（五月九日付「朝日」広告）。

五月一〇日から、勝諺蔵脚色、福助・太三郎・雁治郎・璃笑の一座が中座において「真似浪花朝日俤」と題して初演（番付）。

三月二二日、「演劇新報」第一号創刊、文海は補助（三月一八日付「朝日」広告）。

四月六日から、無署名で「怠惰勉強心組織」を「朝日新聞」に連載（五月一三日、大団円）。

一八年四日、竹柴諺蔵脚色、朝日座において「怠惰勉強心組織」初演（番付）。

四月一九日から、吉野に遊ぶ。「朝日新聞」持主村山竜平の発議で、岡野半牧・関徳・上野理一と共に同行した。人力車五台を連ね生駒を越え、夜半に吉野に登り一泊。二〇日は花と旧跡をたずねた。（四月二三、二四、二五日付「朝日」・遂軒子「芳山紀遊」）文海の「朝日新聞」時代の最も楽しい思い出として永く記憶に残る（「大阪朝日新聞初期時代吉野の花見」）。

七月九日から、無署名で「雲間月」を「朝日新聞」に連載（八月二〇日、大団円）。

一八年五月、「雲間月」を駸々堂より出版（一八年五月一三日「朝日」記事）。

一八年九月、竹柴諺蔵脚色、三五郎・荒太郎・芝鶴の一座が朝日座において「其俤雲間月」と題して初演（番付）。

この頃か、文海の家門殷盛を極め、俳優・落語家・音曲家などあらゆる芸人が詰めかけていた。

一一月一日、大阪市東区釣鐘町二町目松屋町東入南側に転宅（一一月一日付「朝日」広告）。その後、高麗橋三丁目・北浜五丁目・高麗橋四丁目と転々した（昭一四年一二月一〇日刊「東区史」第五巻）。

一月六日、妻ツル（大阪府堺市戎之町東一丁竹山平八二女・安政五年一二月一日生）入籍（除籍謄本）。

一一月七日から、無署名で「朝桜大和魂」を「朝日新聞」に連載（一八年三月一日、大団円）。

一九年四月、「朝桜日本魂」を駸々堂本店より著刊。

一八年一月三一日から、竹柴諺蔵脚色、卯三郎・瓢若・市若・源五郎の一座が弁天座において「朝桜大和魂」を初演（番付）。

明治一八年（一八八五）　三八歳

一月から、演劇改良に奮発する朝日座々主浅野治助の要請により、同座へ小宮山天香と共に改良歌舞伎正本を提供することゝなる（口上書）。一月三一日から同座において上演されたリットンの戯曲の翻案「人間万事金世中」、三月三一日からの「雪竹伏水曙」（番付）などは、文海らの後援によるものか。

四月一〇日から、無署名で「趣向ハ沙士比阿の肉一斤文章ハ柳亭種彦の正本製何桜彼桜銭世中」を「朝日新聞」に連載（五月二〇日、大団円）。

一九年一月、「何桜彼桜銭世中」を和田文宝堂より閲刊か。

五月一六日から、竹柴諺蔵脚色、宗十郎・橘三郎の一座が戎座において「何桜彼桜銭世中」を初演（番付）。

五月二一日から、無署名で「新編三枝物語」を「朝日新聞」に連載（七月二二日、大団円）。

九月、「新編三枝物語」を校刊か。

九月、竹柴諺蔵脚色、延若・橘三郎・紫琴・延三郎の一座が戎座において「新編三枝譚」を初演（番付）。

九月二三日から、無署名で「人形筆有馬土産」を「朝日新聞」に連載（一二月三日、大団円）。

一一月二〇日から、竹柴諺蔵脚色、三五郎・百々之助・八百三郎の一座が朝日座において「人形筆有馬土産」を初演（番付）。

一〇月二四日、「朝日新聞」を退社（朝日新聞社史編修室保存資料―清水三郎氏示教）。「日本絵入新聞」に引抜かれたためである。

一〇月二七日、「日本絵入新聞」に入社か。

明治一九年（一八八六）　三九歳

この頃か、「日本絵入新聞」を退社。

七月一日、「朝日新聞」に再入社（朝日新聞社史編修室保存資料―清水三郎氏示教）。

七月から、大塩平八郎の事蹟を改良歌舞伎化するため、史実調査に奔走した（七月三一日、八月二二日刊「大阪歌舞伎新報」記事）。一一月、竹柴諺蔵脚色、宗十郎一座により京都四条北側演劇において初演された活歴劇「大塩平八郎言行録」（番付）が、その結実である。

八月二八日から、無署名で「蜃気楼」を「朝日新聞」に連載か（一二月九日、大団円）。

一二月、「寓意小説」蜃気楼」を、駸々堂本店より出版。二〇年一月か、「社会進歩」蜃気楼」を出版か。

一二月、三五郎・滝之助の一座が朝日座において「蜃気楼朝日粉色」と題して初演か（昭一六年三月三〇日刊「松竹関西演劇誌」）。

九月二五日、南歌楼における大阪演劇改良会発起相談会に出席（九月三〇日付「大阪歌舞伎新報」記事）。

明治二〇年（一八八七）　四〇歳

六月八日から、無署名で「爆発奇談午睡夢」を「朝日新聞」に連載か（二二日、中絶）。

二二日、これが当局の忌諱にふれ、「朝日新聞」発行停止となる（二九日、解停）（六月三〇日付「朝日」社告）。

八月四日、来阪中の坪内逍遙を招待。八日、逍遙を中座に誘うつもりで訪ねたが、逍遙があまり乗り気でないので辞去（坪内逍遙「日記」未発表浪花芸者」―昭三〇年九月刊「中央公論」による）。

九月一五日から、無署名で「士族の商業」を「朝日新聞」に連載（二一年二月一日、大団円）。

二二年一月、「士族之商業」を駸々堂より著刊か。二四年四月二九日、再版。

一〇月、久保田米遷らと共に浪花座に活歴劇「千種穐嵯峨月影」を提供か（昭二年一一月八日付「大毎」・中村雁治郎「自伝」）。不評。これで演劇改良熱も一頓挫を招いた。

明治二一年（一八八八）　四一歳

二月三日から、無署名で「恐も新年の御その儘に雪埋松」を「朝日新聞」に連載（五月一二日まで）。

二二年五月二五日、「雪中松」と改題し日吉堂より著刊か。

二五年一〇月、再版。

五月一三日から、無署名で「四つの緒」を「朝日新聞」に連載（七月一二日、大団円）。

一二月二四日、「汝所好」と改題して駸々堂本店より著刊。

七月一〇日から、「樹間の月」を「東京朝日新聞」に連載（九月五日まで）。後に自ら「骨を折り侯作（ママ）」という力作であった（「各大家の処女作」）。

二二年五月二八日、「銀釵」と改題し駸々堂本店より著刊。

八月四日、神戸駅において京阪漫遊中の逍遙と出会ったか（坪内逍遙「逍遙日記」―昭四四年九月三〇日刊「坪内逍遙研究資料」による）。

九月六日から、「貧福」を「東京朝日新聞」に連載（一〇月一九日まで）。

二二年七月三〇日、「貧福」を駸々堂書店より著刊。

一二月六日から、「狂花」を「東京朝日新聞」に連載（二二年二月二日まで）。

二二年三月一八日（?）、「狂花」を岡本明玉堂より著刊。

一二月二五日から、「紫藤花」を「朝日新聞」に連載（二二年三月三一日、大団円）。

二二年五月、竹柴諺蔵脚色、雁治郎・荒五郎・珊瑚郎・厳笑・吉三郎の一座が浪花座において「影写朝日紫陽花」と題して

初演（番付）。

明治二二年（一八八九）　四二歳

四月二〇日、文芸雑誌「なにはのはる」第一号創刊。文海は幹事。五月一〇日、第二号刊、これにて廃刊。

四月二一日、網島鮒宇楼における新聞雑誌記者懇親会に「なにはのはる」を代表して出席（四月二三日付「大朝」記事）。

七月一日、名古屋へ汽車旅行。取材と養痾とのためであった（「悪因縁」）。「烈女勝子伝」の材料を得る。

九月五日から、「雪竹伏水曙」を「百千鳥」に連載（二三年一月二〇日、をはり）。

のち、「雪竹伏水曙」（未見）を駸々堂より著刊。二六年一〇月三〇日、再刊。

九月二五日、詐欺取材犯（?）の嫌疑により、大阪府警察本部に引致され、爾後留置となり取調べを受ける。一〇月一二日、堀川監獄へ入監し（一〇月一三日付「大朝」記事）、大阪始審裁判所において葛葉予審判事・川淵検事の係で取調べを受ける。一一月二日、予審終結、犯罪の証憑不十分で免訴放免の言渡があり、出獄した（一一月五日付「大朝」記事・広告）。

九月二七日「大阪朝日新聞」を解雇になる（九月二七日付「大朝」社告）。

明治二三年（一八九〇）　四三歳

四月、「大阪毎日新聞」入社。（四月二四日付「大毎」広告）

六月一九日から、「檻獄土産十種之内千草結馬場朝露」を「大阪毎日新聞」に連載（七月二六日、完結）。

一一月、竹柴諺蔵脚色、八百蔵・荒五郎・卯三郎・若松の一座が弁天座において「千種結馬場朝露」を初演。

七月二七日から、「松山奇聞凌霜談」を「大阪毎日新聞」に連載（九月一八日、結局）。

九月一六日から、山崎琴書が京都新京極の講釈席において「凌霜談」を読む（九月一七日付「大毎」記事）。

一〇月五日刊「江戸むらさき」に「街談巷説・作者類聚名彙」が掲げてあるが、宇田川文海は用姓の一人として載っている。

一一月二日、西村天囚らと共に、在阪文芸同好者懇親会を広告（一一月二日付「大毎」広告）。〔直後発起人署名から天囚ら「大阪朝日新聞」系五名脱落。〕九日、静観楼における大阪文芸会発起者会に出席（一一月一一日付「大毎」記事）。

一二月七日、木内愛渓・竹柴諺蔵らと共に大阪文芸会を創立、その代表的存在であった。備一亭における第一回例会に出席（一二月

九日付「大毎」記事)。

明治二四年（一八九一）　四四歳

二月七日刊、吉田香雨「当世作者評判記」に評がある。「関西第一流の小説家と……の大言に負かざるの作者ならん氏の得意とする所は時代小説即ちお家物にあり……」。文海は好んで「翻訳臭味の人情」ものも書いたが「お家物」が最も得意であった。

二月二六日、第一楼における大阪文芸会例会に出席、「故人小団次が鼠小僧を演ぜし時の奇談」を談話（二月二八日付「大毎」記事）。五月九日、洗心館における同会世話人会に出席、機関誌発行を協議（五月一一日付「大毎」記事）。五月二九日、第一楼における同会例会に出席（五月三一日付「大毎」記事）。七月七日、丸水楼における同会臨時会に出席（七月九日付「大毎」記事）。七月二〇日、大阪府立博物場における同会例会で講演の予定（七月九日付「大毎」記事）。九月一〇日、備一亭における同会臨時会に出席（九月一二日付「大毎」記事）。一〇月二三日、備一亭における同会例会に出席（一〇月二五日付「大毎」記事）。一一月二五日、備一亭における同会例会に出席（一一月二七日付「大毎」記事）。一二月二七日、備一亭における同会忘年会に出席（一二月二九日付「大毎」記事）。

四月一三、一四日、吉野に遊ぶ。画家の鈴木霍斎・中川芦川・稲野孝之と和田風月とが同行（「吉野土産」）。

九月一九日から、「霧の籬」を「大阪毎日新聞」に連載（一一月一六日、完）。

二五年二月、竹柴歌女輔脚色、片市・我童の一座が中座において「霧廼籬」を初演（二五年一月一〇日付「大毎」記事）。一〇月一九日から、「紅葉」を「大阪文芸」に連載（一一月一六日、完）。

一一月一日付・二七日付「大阪毎日新聞」の西の屋ひがし「大阪文芸」・「大阪文芸二三号妄評」では仲間褒的に取上げられた。しかし、二五年二月一日刊「なにはがた」の木崎好尚「大阪文芸一、二、三、四」では酷評された。

一二月六日、山崎年信追悼会に出席（一二月八日付「大毎」記事）。一二月七日、菊池幽芳、「片輪車」を「大阪文芸」に発表、関西文壇にデビューした。文海は稲野年恒に、幽芳が「今の若いものに珍しい文章を書く青年だ、後生恐るべきものだ」と推奨した（菊池幽芳「私の自叙伝」――大一四年二月二八日刊「幽芳全集」第一三巻による）。

明治二五年（一八九二）　四五歳

二月、「大阪文芸」を宮内省へ献上するため東上。一〇日、江東中村楼における大阪会――大阪関係者の親睦宴に出席（二月一五日付「大毎」記事）。

二月一〇日、「小説叢書かひよせ」第一籠創刊。文海の著作集・個人雑誌とも言うべきもの。

三月七日付「大阪毎日新聞」の菊花「批評・小説叢書貝よせを読む」、六月二日付同紙の西の屋ひがし「小説叢書貝よせ」に取上げられた。

二月二三日から、「身を知る雨」を「大阪毎日新聞」に連載（三月三一日、大尾）。

四月、竹柴歌女輔脚色、吉三郎・璃寛の一座が中座において「身を知る雨」を初演（三月一一日付「大毎」記事）。

二月二七日、備一亭における大阪文芸会例会に出席、「東遊見聞の一斑、東京の文学世界」を講演（二月二七日付「大毎」記事）。五月二九日、備一亭における例会に出席（五月三一日「大毎」記事）。

三月、月瀬に遊ぶ（「梅を観るの記」）。

六月五日、静観楼における関西新聞雑誌同業懇親会に「大阪毎日新聞」代表の一人として出席（六月七日付「大毎」記事）。

この頃、東区道修町二丁目二四番屋敷（五月一五日刊「貝よせ」奥附）より同区横堀三丁目七七番屋敷へ転宅（六月一五日刊「貝よせ」奥附）

この頃、徳田秋声が翻訳の一部を持参して来訪（徳田秋声「無駄道」「光を追うて」―昭三八年一月一〇日刊「秋声全集」第一二巻による）。

一〇月二六日、邦福禅寺における故河竹能進七回忌法会に出席（一一月二五日刊「大阪文芸雑誌」雑報）。

一一月一三日、箕面山秋錦楼における関西新聞雑誌記者懇親会に「大阪毎日新聞」代表の一人として出席（一一月一五日付「大朝」記事）。

明治二六年（一八九三）　四六歳

一月二日、「小説叢書貝よせ」第一一籠刊、これにて廃刊か。

二月八日から、「奥平源八郎」を「大阪毎日新聞」に連載（四月一八日、大団円）。

四月、我当・璃寛の一座が中座において「奥平源八郎」を初演（三月二三日付「大毎」記事）。

八月二日から、三丹地方に旅行する。同行は彫刻家兼画家の小永井天橋と詩人柳原東雲。京都、福知山、宮津、出石、湯島……姫路（「偷閑紀遊」）。

九月一七日から、「仙石騒動袖香炉」を「大阪毎日新聞」に連載（二七年二月一四日まで）。

一〇月、須磨へ行く（「厳島後編」）。

一一月一五日刊「この花草紙」に花もりの翁「評釈いり浪華小説家婦人見立」というものが掲げてあるが、「宇田川文海は腕の凄き老妓の如し……」とある。

一一月一七、二七日、「和気清麻呂」を「大阪毎日新聞」に掲載。二七年二月、我童・璃寛の一座が角座において「和気清麿」を初演（二七年一月二八日付「大毎」記事）。

一二月一五日刊「この花草紙」に花守の翁がうまご「三年後の浪華文壇未来記」というものが掲げてあるが「宇田川文海　大阪文芸を再興す……評判は『芦の一節』と相若けり」とある。「芦の一節」というのはこの未来記で渡辺霞亭が発行するという文芸雑誌のことである。

明治二七年（一八九四）　四七歳

二月二二、二三、二四日、桜井へ旅行（「三日の旅」）。

四月二九日から、「厳島」を「大阪毎日新聞」に連載（六月一五日、上編了）。七月二四日から、毛利元就事蹟調査のため、安芸吉田・厳島へ旅行する（「厳島後編」）。八月二六日から「厳島後編」を「大阪毎日新聞」に連載（一〇月一六日、結尾）。

一一月一六日、「少年文学三拾二編」契沖阿闍梨」を博文館より著刊。以後も契沖について関心を持ちつゞける。

明治二八年（一八九五）　四八歳

八月、福井座に、日清戦争を仕組んだ「報国美談電信技手」を執筆提供（八月九日付「大毎」記事）。

一一月刊「早稲田文学」掲載の半文生「浪花文壇の諸先生に告ぐ」に「宇田川半痴先生が相変らずの御家小説を、相変りたる着想にて書かるゝ……例に依りて例の如くなるべきか」とある。

一二月二九日から、「猿面郎出世双六」を「大阪毎日新聞」に連載（二九年二月二〇日まで）。

明治二九年（一八九六）　四九歳

一月一〇日、政岡松濤・斎藤松洲と共に浪花座観劇（「岡野半牧を悼む」）。

〔一月一一日、岡野半牧没。〕

この年、続き物はほとんど「猿面郎出世双六」一本という打込み方であった。三月一二日から次編（五月二三日、結了）。八月二〇日から第三編（一一月七日、大団円）。「大評判」（「猿面郎出世双六前編完結謝辞」）だったからであるが、四月二五日刊「文庫」掲載の記者の「関西文壇の消息」には「文海は関西文壇の老将など言ふものあれど、老将も斯く老朽して太閤記の焼直しを為るやうになりては既にダメなり」とある。

六月二九日から、「蚤の痕」を「大阪毎日新聞」に連載（七月二一日、大尾）。

八月、勝歌女輔脚色、我当・市蔵の一座が中座において「蚤廼痕」を初演。

七月二五日より、「猿面郎出世双六」第三編取材旅行に、山城・近江・丹波方面へ向け出発（七月二六日付「大毎」記事）。

明治三〇年（一八九七）　五〇歳

四月、摂津・和泉・紀伊三国を巡覧する。六月、紀伊・和泉を漫遊し、名所旧跡を尋ねる。養痾・避暑・「南海鉄道案内」執筆のためであったらしい（「南海鉄道案内」）。

明治三二年（一八九九）　五二歳

この年以後、「大阪毎日新聞」に文海の続き物なし。

〔この年、関西文壇は新生面を開く。東京文士の新作紹介・関西青年文学会の隆起・批評精神の覚醒など〕

〔八月一七日から、幽芳、「己が罪」を「大阪毎日新聞」に連載（一〇月二一日、前編終）。〕

一一月刊「よしあし草」に掲げられた冶雷庵「幽芳子の創作」に、「文海已に其文学的生命を絶ちて秋風寂寞の地（浪華文壇のこと）更に荒廃に傾かんとする……」とある。

明治三三年（一九〇〇）　五三歳

二月二五日、山中重太郎に慫慂・案内されて、はじめて天理教の本部に行く、（「余は如何にして道の友に筆を執る事になりし乎」）。「此に始めて此教を信ずる心を発し」月詣するようになった。四月二日、はじめて天理教教長公中山新次郎と面会する（「月詣集」）。

五月二八日、天理教機関紙「みちのとも」改良刷新の時に当たり、聘されて第一〇一号より記者として編集に与る。その用務のため例月一回以上本部に出頭するようになった（「感謝」）。

明治三四年（一九〇一）　五四歳

一一月二三日付「万朝報」（昭三五年一月二〇日刊「明治文化資料叢書」第一二巻による）掲載「当今の新聞記者11、宇田川文海先生」に「宇田川文海の名は一時関西の文壇を風靡したりき、大坂朝日新聞に於て、大坂毎日新聞に於て、文海先生の小説は蓋し第一の読物なりしなり、匆々十余年、今はそれも夢となりぬ、吾人は此記事の中に先生の名を漏すに忍びざるを感ず……」とある。既に点鬼簿の人のごとくである。

一一月二四日、高田実らに招待され播半楼における会合に出席したが、この場で大阪市会議長森作太郎ら同席者が仮発起人となり演劇改良会を組織することが決定（一一月二六日付「大毎」記事）。

明治三五年（一九〇二）　五五歳

一月七日、天理教校々舎新築落成開校式に出席、祝辞演説（「祝辞」）。

一月一九日、大阪府知事官邸における大阪演劇改良会発起人会に出席。知事菊池侃二ら一八名（一月二一日付「大毎」記事）。五月二七日、南地演舞場における大阪演劇協会発会式に出席、評議員に選出される（五月二九日付「大毎」記事）。六月二九日、大阪倶楽部において（七月一日付「大毎」記事）、九月三〇日、大阪倶楽部において（一〇月二日付「大毎」記事）、評議員会が開催されているが、文海の出欠は判明しない。大阪演劇協会は程なく有名無実化したようである。

この年、管野正雄・すが、入門。遺族の話（清水三郎氏「朝日新聞外史64」による）によれば、文海は正雄を後継者にするつもりでアメリカへ遊学させたという。

この年、斎藤松洲らの美術談話会に出席、「詩人と画家」を講演（「詩人と画家」）。

明治三六年（一九〇三）　五六歳

五月一三日、京都鉄道会社の招待で全国新聞記者四〇余人と共に保津川下りを楽しむ。船中で文海は、管野すがの浪華踊反対説を紹介し同意を求めることがあった（「保津川下り」）。

この年か、浪華教会夏期講習会において「曲亭馬琴の信仰心」を講演（「曲亭馬琴の信仰心」）。

八月一二日から、天満教会堂における旧約聖書総論一〇回講義（主催天満青年共励会・講師牧野虎次）を聴講し（「所感」）、九月一二日、同教会内における講師慰労の親睦会に出席、聴講者一同を代表して謝辞を述べた（九月一七日付「基督教世界」大阪通信）。

明治三七年（一九〇四）　五七歳

六月一三日から、兵神分教会における天理教々師講習会の講師を勤め「詔勅録」「明倫歌集」を講じる（二〇日まで）（七月一五日刊「みちのとも」彙報）。

一〇日、堺利彦宛に「近年熱心なる基督信者となり、昨今は又社会主義の研究を始めて居」る旨の手紙を送った（一〇月一六日付「平民新聞」・枯川生「平民日記」―昭三三年三月二五日刊「史料近代日本史・社会主義史料」による）。

一〇月一三日、高安分教会における出征軍人軍属戦病死者忠魂弔慰祭に臨席、戦争の是非について講話（一一月一五日刊「みちのとも」彙報）。

一二月六日から、五日間、中河分教会における高安・中河・大県三分教会連合教典講習会に補助として出席（一二月一五日刊「みちのとも」彙報）。一〇日、東葛城山上における講習会の竟宴にも出席、これには管野すがも同行した（一二月一五日、三八年一月一五日刊「みちのとも」・幽月女史「天上界」）。

明治三八年（一九〇五）　五八歳

二月一五日刊「みちのとも」に須賀子（すが）の「七五三の内（中）」掲載。三月一五日刊同誌次号以下にすがの著作なし。すがはこの間に、文海のもとを離れたのであろう。

三月、御津支教会等における大阪市部講習会に助講として出席（四月一五日刊「みちのとも」彙報）。

三月二二日、大阪市東区横堀三丁目一五番地より大阪府下東成郡墨江村大字上住吉六三へ転籍（除籍謄本）。

四月一四日、玉手山安福寺に参詣、一六日、滝谷不動堂に参詣（「講余間話」）。

五月二三日、芦津分教会における天理教教師講習会試験後、講習生に講話。六月三日、高安分教会における大阪兵庫合同天理教教師講習会卒業式に来会（六月一五日刊「みちのとも」彙報）。

九月一一日、天理教校生徒の秋季修学旅行に同行して、浜寺公園・住吉神社へ行く（「修学旅行一半の記」）。

明治三九年（一九〇六）　五九歳

二月一九日、天理教教祖二〇年祭・東北凶作地方人民救済演説会の司会を勤め開会の辞を述べる（二月二二日刊「みちのとも」彙報）。

四月一五日、文芸雑誌「墨江」第一号創刊。文海は編輯兼発行人。

四月、「墨江」文芸講話会を始め、講演（四月一五日刊「墨江」記事）。

五月六日、玉出座における幻灯演説会に出席、講演（五月一五日刊「墨江」記事）。

六月三日、墨江村岡崎邸における墨江文学会第一回会員懇親会に出席、演説（六月一五日刊「墨江」記事）。

八月一六日、公園二葉亭における茶話会に出席、開会の辞を述べる（九月一五日刊「墨江」記事）。九月、公園松の屋における茶話会に出席、題を月に採った五分間演説をする（一〇月一五日刊「墨江」記事）。一二月一日、公園姫松亭における茶話会に出席、司会を勤める（一二月一五日刊「墨江」記事）。

一〇月一五日刊「文章世界」に有磯逸郎「忘れられたる文士」というものが掲げてあるが、「明治二十年前後、新聞小説家として、最も勢力あり呼声高かったのは宇田川文海氏であった。大阪朝日新聞が、今日新聞社会に覇を称へてゐるのも、之を十五六年前二十年

前に泝ると、此の宇田川文海氏の筆に成った続物の力が与って多かったのだ。続物の内容は健忘性なる余は、大半忘れたが、此の小説家の勢力は関西の新聞壇を風靡して、何人といへども其の矢面に立つ者が無かった一事は、歴然として記臆に遺こってゐる。而して門下に二三の英学生を置いて、西洋小説を換骨脱胎して、濃厚なる関西人を喜ばしめた手際は驚くべきものであった。然かも新聞小説家の巨擘たる此人は、明治二十六七年頃に至りて寂然として、無言の中に沈没した。悲惨といふ文字は恐くは此人の如き運命に形容せらるゝ言葉であらう……」とある。

一二月一五日、「墨江」第八号刊、これにて廃刊か。

この年か、東上（大二年一〇月刊「道乃友」彙報）。

明治四一年（一九〇八）　六一歳

二月二四日、郡山分教会における天理教公開演説会に出席、演説。三月一日、敷島分教会。二日、桜井分教会（三月二二日刊「みちのとも」彙報）。

明治四二年（一九〇九）　六二歳

二月一八日、天理教校控所における青年有志者の会合に出席、「雑感」を演説。天理教青年会の発起人に加わる（二月二二日刊「みちのとも」彙報）。

三月一三日、中河教会における天理教独立奉告祭に出席、祝辞演説（三月二二日刊「みちのとも」彙報）。四月一三日、高安大教会における改称奉告祭に出席。一二日、芦津大教会。三日、堺分教会における改称奉告祭に出席、祝辞演説。一八日、平野分教会（四月二九日刊「みちのとも」彙報）。

四月二九日、「みちのとも」誌刷新。主任に吉川万次郎を迎え、文海は奥谷藍水・増野皷雪・小野翠浪と共に一編集員となる。

七月一四日、敷島大教会における戊申詔書講演会で講演（八月二二日刊「道乃友」彙報）。

一〇月、兵庫県下教会連合開催戊申詔書講演会講師に聘され、県下を巡回する。一六日、伊丹支教会。一七日、三田町農林学校講堂。一九日、三木町三木支教会「上下一心」。二一日、社分教会「勤倹治産」。二三日、加西分教会。二四日、生野町小学校講堂。二五日、豊岡分教会。二六日、振武館。二七日、飾東分教会。二八日、加古川町神正支教会。二九日、明石町明石支教会。三〇日、西の宮三浦座（一一月二二日刊「道乃友」彙報）。

明治四三年（一九一〇）　六三歳

三月一四日から、兵庫県美囊郡美囊分教会青年講習会の科外講師を嘱託される（「去年のしをり」）。

明治四四年（一九一一）　六四歳

〔一月二五日、「大逆」事件の管野すが刑死。〕

二月、「時事に感ずる所」があって、社会・人心の悪に応じるには悪をでなく善をもって応じよ、そうすればその改良もできる……と「しみ〳〵感じた」（「嗚呼教祖」）。

明治四五年＝大正一年（一九一二）　六五歳

四月二三日、天理教婦人会堺委員部発会式に出席、「人の心と神の心」を講演（五月刊「道乃友」彙報）。

五月一八日、大阪府東成郡生野村大字国分北大教会移転建築落成昇格奉告祭に出席、祝辞演説。一九日、兵庫県多可郡杉原谷宣教所移転奉告祭に出席、「心一つは吾物」、二〇日、「天理教と国民道徳」を講演（六月刊「道乃友」彙報）。二一日、豊原支教会「三教会同と天理教」。二三日、宇仁支教会「国民道徳の根本義」（「杜鵑一声」）。

五月二九日、浜寺公会堂における天理教演説会に出席、「平凡の信理」を演説（六月刊「道乃友」彙報）。

八月二二日、第二回天理教教師講習会に出席、「講話に就て」を講演（「続講演資料」）。

九月一六日から、兵神大教会における兵神青年会第一回講習会に聘されて講師を勤める（二〇日まで）（一〇月刊「道乃友」彙報）。一〇月九日、兵神青年会支部発会式に出席、祝辞演説、会規定第一条に就て所感を述べる。一一日、口吉川支教会「ちいさい教祖になれ」。一二日、学校講堂「天理教と国民道徳」（「見るがまま聞くがまま」）。二二日、兵神青年会第一回総会に出席、「艱難に就て」を講演、のち通俗講話として経済より見たる秀吉の事を語る（一一月刊「道乃友」彙報）。

一二月四日、加古分教会教祖殿並事務所新築落成奉告祭に出席、祝辞演説（大正二年二月八日刊「道の友」彙報）。

大正二年（一九一三）　六六歳

三月八日、兵庫県朝来郡中川村之内物部村大物部宣教所鎮座祭に出席、「生ける神」を講演、兵神青年会美嚢支部発会式に出席、「新宗教と新生活」を講演。一七日、多紀郡上板井村味川宣教所「真実の信仰」「天理教の特徴」（「囀り」）。

四月一八日、中吉川分教会において「教祖の三訓」を講演。一九日、「人一条」「口は如何に働かす可き歟」。二〇日、「天理教の三徳」。二一日、加東分教会教祖殿新築落成奉告祭に出席、「大神と教祖」を講演。二四日、兵神大教会における兵神青年会第二回総会に出席、「耳及眼は何の為に付いて居るか」を講演（「囀り」）、五月八

日刊、六月八日刊「道の友」彙報)。

五月二日、宇佐分教会の招聘に応じて始めて九州へ渡る。三日、竹田支教会で講演。八、九日、宇佐分教会。一〇日、椎田(六月八日刊「道の友」・藍水「九州下り」)。一二日から、山口県大島郡臨時講演会に出席、講演。一二日、中小松支教会「生活と信仰」。一三日、同村立明新尋常高等小学校講堂「口は如何に働かすべきか」。一四日、久賀支教会「天理教の三教」。一五日、「天理教の三訓」(六月八日刊「道の友」彙報)。一六日、御影茅沼浦宣教所「見える教会と見えぬ教会」。一七日、脇の浜名田支教会「平凡の真理」(「講演紀行揚雲雀」)。

八月八日、船場大教会における大阪青年講演会に出席、「教祖の御人格」を講演(九月八日刊「道の友」彙報)。

八月二四日、宣教員第二回講習会に出席、「おはなしに就て」を講演(九月八日刊「道の友」彙報)。

九月中旬から、東上。一〇月一一日、帰宅(「茸狩」)。

一〇月一二日、丹波古市古今味宣教所において「神懸」を講演。一六日、帰宅(「茸狩」)。

一〇月二〇日、茅沼浦宣教所において「天理教祖」の一節を説教。二一日、有馬町宣教所において講話。二二日、兵神大教会青年会において「立教」を講演(「茸狩」)。

大正三年(一九一四)　六七歳

七月、天理教校講師に任命され、週三日間ずつ天理教校において宗教法令・御かぐら歌について講義することゝなる(七月八日刊「道乃友」彙報)。

九月七日、天理教婦人会本部における「道乃友」時局講演会に出席、講演(九月八日刊「道乃友」彙報)。一〇月三一日、天理中学校堂における「道乃友」講演会に出席、「どうすれば日本が唐をまゝにすることが出来るか」を講演(一一月八日刊「道乃友」彙報)。

一一月二五日、増野正兵衛教正の葬儀に参列、埋葬詞を朗読。二九日、天理教婦人会本部における故増野教正追悼演説会に出席(一二月八日刊「道乃友」彙報)。

大正四年(一九一五)　六八歳

一月一一日、天理教婦人会本部における故管長閣下(中山新治郎)御追悼講演会に出席(一月二六日刊「道乃友」彙報)。

一月二四日、土曜会において「教祖の御予言」を講演(「教祖の御予言」)。

三月二〇日、三重県御糸支教会設立二〇年祭に出席、「宗教と生活」を講演(「伊勢路の春」)。

四月、渡辺亮、「上方趣味」を創刊。文海は社友。

四月一一日、阿部野宣教所における「道の友」地方講演に出席、「倫理的宗教としての天理教」を講演（五月八日刊「道乃友」彙報）。

一〇月二七日、天理教校における御大典奉祝記念大講演会に出席（一一月八日刊「道乃友」彙報）。

大正五年（一九一六）　六九歳

一〇月二五日、天理中学校における「道乃友」三百号記念大講演会に出席（一一月一五日刊「道乃友」彙報）。

大正六年（一九一七）　七〇歳

二月一八日、円珠庵における契沖忌（主催霊樹・しほさゐ両会）に参詣、契沖について講演（「契沖」）。

六月二七日、道友社階下における「道乃友」講演会に出席、「天理教の新らしき観察」を講演（七月一五日刊「道乃友」彙報）。

七月一四日、大阪府庁内第五〇回救済事業研究会に出席（八月一五日刊「道乃友」彙報）。

一〇月二三日、「道乃友」編集部へ来て諸務を終え、二九日、帰阪（一一月一五日刊「道乃友」彙報）。

大正七年（一九一八）　七一歳

一一月二七日、天理中学校講堂における故管長五年祭追想講演会に出席、「噫五年」を講演（一二月一五日刊「道乃友」彙報）。

大正九年（一九二〇）　七三歳

夏、駿河小山町へ行き富士紡績会社の依頼に応じ、工場・倶楽部・天理教会等で講演（「ちいさなはたらき」）。

一〇月二八日、天理中学校講堂における道友社三〇週年記念大講演会及祝賀会に出席、「三十年後の道の友」を講演（「三十年後の道の友」）。

大正一〇年（一九二一）　七四歳

七月三〇日、駿河小山町へ行き、富士紡績会社工場付属病院長小笠原豊邸に寄宿。避暑と転地療養と講演とのためであった。三日、鮎沢宣教所において「あしきをはらうてたすけたまへてんりわうのみこと」「あしきをはらうてたすけせきこむ一れつすましてかんろうだい」を講演。七日、富士倶楽部「豊太閤と教育」。九日、病院「豊太閤の半身」。一〇日、鮎沢宣教所の月次祭に参列、講演。一一日、工場の寄宿舎「平凡の真理」（「ちいさなはたらき」）。

初秋から、高齢のうえ不順な気候のため病気がちであった。冬に

なってからは持病の気管支炎が起こり昼夜咳に苦しめられ、病床にあった（「病中所感」）。

大正一一年（一九二二）　七五歳

五月頃、床上（「舞踊の流行」）。

秋から、今年もまた病床に臥す（「歳晩感謝」）。

一二月一四日、小沢扶公に扶けられ河内天見村の地蔵寺を訪ね弘道僧正と会見して、浄厳和尚と近松との関係を尋ねた（「近松翁と密教の高僧」）。

大正一二年（一九二三）　七六歳

三月二六日、大阪河毛武雄邸における大阪史談会復興発起会に出席。四月二八日、万福寺における第二回例会に出席、「国学者としての契沖阿闍梨」を講演。六月一六日、市岡第一尋常高等小学校における第三回例会に出席、「河村瑞賢と紀伊国文左衛門」を講演、「春日出の八景園と飯左太郎の事蹟に就て」を座談。七月一五日、阿部野神社における第四回行事に出席、「顕家卿の夫人に就て」を講演（昭一一年九月二五日刊「大阪史談会報」・「大阪史談会沿革誌」）。

この頃、大阪朝日新聞社主村山竜平の温情に浴すことがあった。「或る人」が村山に、文海の近況を語って「文海翁は女婿斎藤松洲氏が、日本画壇に相当認められてゐるから、物質では敢て乏しさを訴へないが、精神的に今一度返り花を咲かせたい……」と言い出した所、村山はかつて文海が「大阪毎日新聞」に走ったことを意に介せずこれを快諾し、文海の著作が再び「大阪朝日新聞」に載るよう取り計らったのである（大一三年一〇月一日刊「太陽」記事）。

九月一五日、鈴木武雄、「うた沢」を創刊。文海は編集顧問。

一二月から、南向きの一室に閉籠もり、あたかも冬眠のような状態で冬を過した（「病中問答」）。

大正一三年（一九二四）　七七歳

二月二三日、住吉神社における大阪史談会第六回行事に出席、「歴史に現はれたる住吉」を講演。六月一五日、野村ビルディングにおける第八回行事に出席、「豊太閤と利休」を講演。六月一八日、天下茶屋芽木小兵衛邸における第九回行事に出席、「紹鷗と利休」を講演。七月一五日、大阪城址における第一〇回行事に出席、「真田幸村父子に就て」を講演。九月一五日、野村ビルディング中央亭における第一二回行事に出席、「豊公と利休」を講演（前掲「大阪史談会沿革誌」）。

六月一四日、大阪市民博物館における贈位卿賢展覧会記念市民講座に出席、「国学者としての契沖阿闍梨」を講演（「国学者としての

契沖阿闍梨」)。

二、三年前から耳が遠くなり、それが漸次強くなってこの頃は、耳聾に近い容態となってしまった(「神の御声」)。

一一月一〇日、在阪名士・知己によって宇田川文海翁祝寿会発起人会が組織され、一二月一日、大阪市北区大工町天満天神社において祝寿会が開催された。来会者三〇〇余名、盛会であった。文海は夫人と共に出席、「新聞記者に成るまで」を演説。一四年八月二五日、「喜寿記念」を関係者に配布(「喜寿記念」)。

一二月から、老衰病が甚だしくなり、春まで臥床(「普選の実施と社会的宗教」)。

大正一四年(一九二五)　七八歳

一月二七日、大阪朝日新聞社楼上における江戸音曲大会(主催うた沢社・後援大阪朝日新聞社)に出席、「歌聖隆達」を講演(二月二〇日刊「うた沢」記事)。

五月一五日、野村ビルディングにおける大阪史談会関係者による故永江多喜馬追悼会に出席、追憶談を手向ける。六月一五日、野村ビルディングにおける大阪史談会第二一回行事に出席、「下河辺長流の或一面」を講演(前掲「大阪史談会沿革誌」)。

九月から、豊国神社において豊公事蹟の講演を継続した(昭五年一月七日付「大毎」記事)。

大正一五年=昭和一年(一九二六)　七九歳

四月一五日、中之島中央公会堂における大阪史談会第三〇回行事に出席、「木村長門守に就て」を講演(七月一日刊「大大阪」記事)。

昭和二年(一九二七)　八〇歳

五月、東京帝国大学法学部明治新聞雑誌文庫へ蔵書を寄附(五年九月執筆「公私月報」記事)。

冬から、ことに老衰がすゝみ、筆舌も思うに任せぬようになる(「本誌に対する回想談」)。

昭和三年(一九二八)　八一歳

五月一一日、大阪市住吉区住吉町一〇二ノ二に転籍(除籍謄本)。

一〇月二七日、邦福禅寺における河竹能進・勝諺蔵父子の追慕会(主催南木芳太郎)に出席、追慕談を手向ける(「河竹父子の追慕」)。

昭和四年(一九二九)　八二歳

一二月上旬から、風邪気味で臥床、錦堂主治医の手当を受けてい

た（五年一月八日付「大阪時事新報」記事）。

一二月二六日まで、筆を離さなかった（五年一月七日付「大毎」記事）。

昭和五年（一九三〇）　八三歳

一月六日、午後一時過、自邸で死去（一月七日付「大朝」・「大毎」記事）。

一月七日付、各新聞に死亡記事が載る。「大阪朝日新聞」は「操觚界の古老」「現在では最も古い新聞記者の一人」として、「大阪毎日新聞」では「本邦操觚界の元老であり国史の研究、殊に豊太閤研究家として令名ある……」として、八日付「大阪時事新報」は「著名の国学者」として、二〇日付「みちのとも」は同誌の「編輯同人である本邦操觚界の元老」として、夫々文海の死を報じた。

一月八日、午後一時から三時まで自邸において告別式挙行（一月七日付「大毎」記事）、遺骸は住吉葬儀場で荼毘に付す（一月八日付「大阪時事新報」記事）。

四月一日から、「上方趣味」誌上に「逝ける宇田川文海翁」と総題して、岡田翠雨・野崎左文の追憶文が掲載された。

四月二〇日、天王寺夕陽丘町天瑞寺において大阪史談会関係者による宇田川文海翁追悼会が、開催された。当日化粧品商報社より同紙新年号に掲載、文海生前最後の出版物となった「午歳出生の二大偉人、日蓮上人と織田右府」を冊子としたものゝ寄贈があった（九月二五日付「大阪史談会報」記事）。

○記述の典拠が宇田川文海の著作である場合は、書名・題名のみを記した。

○典拠中の略号は次の通り。

明（明治）　大（大正）　昭（昭和）　朝日（朝日新聞）
大朝（大阪朝日新聞）　大毎（大阪毎日新聞）　貝よせ（小説叢書貝よせ）

○史料の採訪その他に当たり御協力を得た、宇田川初氏・清水三郎氏・肥田晧三氏、大阪府立図書館・天理図書館・同志社大学図書館をはじめとする、多くの方々・諸機関に対し、誌面を借りて深甚の謝意を表する次第であります。